

[研 究]

針生検材料・微小検体の病理組織標本作製の工夫

原町赤十字病院 検査部病理

富澤雄

【はじめに】

病理検査室に送られてくる検体は大小様々である。大型の組織は切出して対応するが、前立腺、腎、乳腺などの糸状に採取された針生検材料、脳外科からでる血腫皮膜、耳鼻科の耳道切除物、婦人科の内臓などのピンセットの先でつかめないような微小組織などは、HE標本とすることが可能か不安になるようなものも存在する。

当院では、若干の工夫をすることで、比較的容易にルーチンでの検査処理をすることができるようになった。以下に詳細を述べたい。

【検体処理の実際】

A：針生検材料処理

針生検材料は非常に細長い糸状の組織片であるため、標本作成は難しいもののひとつで、包埋と面出しには特に注意を払わなければならない。そこで、針生検材料をメッシュに挟んで直線にしてパラフィン浸透させ、包埋時に硬質スポンジで押さえつけて薄切面を平面にする方法を考案した。薄切時の面出しが非常に容易になった。

*準備

a.メッシュ：65×45mmを6分割した位の大きさ、1辺だけ閉じられたもの。

b.硬質スポンジ：ティッシュテックファイリングキャビネットⅡに入っている青いスポンジ (photo.1)

方法

i.ホルマリン固定された針生検材料。

ii.メッシュの閉側に、ホルマリン固定された針生検材料を押し付け一直線状にする。針生検材料と平行に開口側をステープラで閉じ (photo.2)、カセットに入れる。

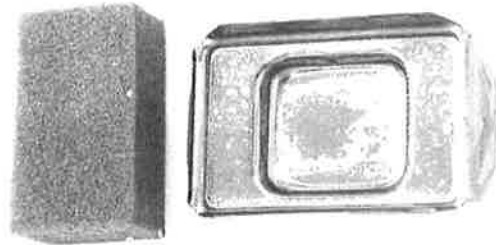


photo.1

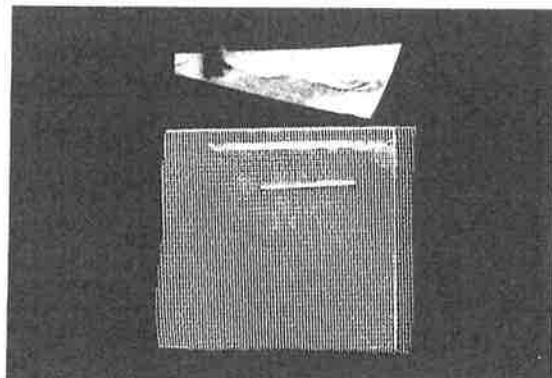


photo.2

iii.型の如く、パラフィン浸透。

iv.包埋処理を行う。メッシュから取り出した針生検材料を包埋皿に移し、その包埋皿の下面のパラフィン冷却部に移動する。包埋皿の下面のパラフィンが全体に白く固まり始めたときに、予め暖めておいた硬質スポンジ (photo.3) で、1秒程度、真上から押し付け、針生検材料の浮きをなくす。パラフィンが固まりすぎてしまった時には、暖めれば、再度、包埋作業可能である。

v.パラフィン冷却・薄切・染色・封入 (photo.4)。

v.パラフィン冷却・薄切・染色・封入。

【結 語】

病理組織検査は、malignancyの確定、否定、炎症性疾患等の診断に必要不可欠である。微小な検体、針生検材料などの診断は病理検査技師の処理技術に委ねられていると言っても過言ではなく、臨床から提出された検体は病理検査室で合目的に処理されなければならない。些細なことであるが、ルーチン検査の一助になればと思う。

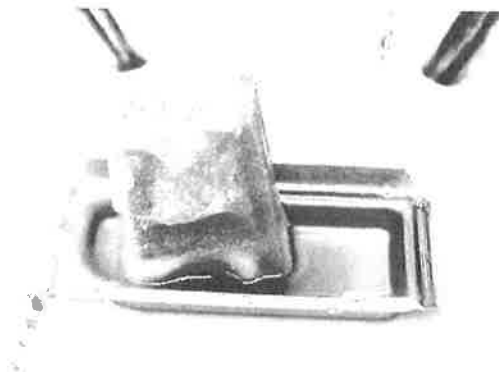


photo.3

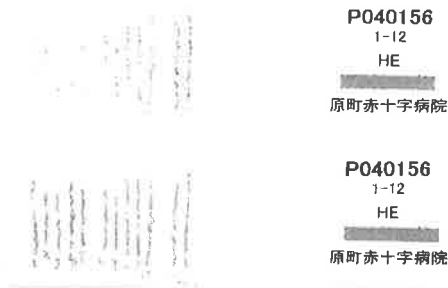


photo.4

B：微小検体処理

微小な検体は、ピンセットで摘みにくく、摘むと組織構築を崩しかねない。そこで、メッシュの中に組織片の入ったホルマリン水を注ぎ入れ、微小な組織片を濾しとる方法を考案した。

* 準備

- a.メッシュ（65×45mm、片側長辺を開いたもの）

* 方法 *

- i.ホルマリン固定された針生検材料を用意。
- ii.メッシュの片側の長辺を切り開き、広げるとロート状になる。指でロート状に開き、先端部を水で濡らした後、微小検体の入ったホルマリン水を注ぎ入れる。組織片は、メッシュで濾しとられ先端部に溜まる。組織片が集められた部分のメッシュをカセットの大きさに切り、開口部をステープラで閉じてカセットに入れる。
- iii.型の如くパラフィン浸透。
- iv.包埋処理時、上記の方法、A：針生検材料処理が有効。